

千里風

[日] 松本杏花 著
叶宗敏 译

人民文学出版社

千里風

〔日〕松本杏花 著 叶宗敏 译

人民文学出版社

图书在版编目(CIP)数据

千里同风/(日)松本杏花著;叶宗敏译. —北京:
人民文学出版社,2010

ISBN 978-7-02-008181-3

I. ①千… II. ①松…②叶… III. ①诗歌-作品集
-日本-现代 IV. ① I 313.25

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2010)第 122007 号

责任编辑:陈 旻

装帧设计:康 健

责任印制:张文芳

千里同风

[日]松本杏花 著

叶宗敏 译

人 民 文 学 出 版 社 出 版

<http://www.rw-cn.com>

北京市朝内大街 166 号 邮编:100705

北京季蜂印刷有限公司印刷 新华书店经销

字数 60 千字 开本 880×1160 毫米 1/32 印张 6.875 插页 3

2010 年 7 月北京第 1 版 2010 年 7 月第 1 次印刷

ISBN 978-7-02-008181-3 定价 20.00 元

如有印装质量问题,请与本社图书销售中心调换。电话:01065233595

序

刘 德 有

我与俳人松本杏花女士第一次晤面，大约是在三年前。

那是二〇〇六年的十一月，我应邀去东京，在国际俳句交流协会第八次大会上以《中国的俳句·汉俳——与日本俳句相比较》为题，做了一次讲演。来自日本各地的众多俳人中，就有从埼玉市专程赶来的松本杏花女士。她身着印有暗花的深色和服，很是庄重、典雅。午餐时，我和妻有幸与她合影留念。遗憾的是由于人多匆忙，未及细谈。

翌年四月下旬，我高兴地收到松本女士寄来的一册她在中国出版的第二本汉译俳句集《余情残心》。这使我忽然想起此前曾经拜读过她的第一本俳句集《拈花微笑》。不想，日前南京的叶宗敏先生打来电话，说他译注的松本女士的第三本俳句集

《千里同风》已排出校样，准备付梓，为此嘱我作序。

对于俳句，我是门外。老实讲，我不谙此道，因此为俳句集作序实在不敢当。但，既是朋友所嘱，却之不恭，只得从命。

俳句，是日本特有的文学形式，距今已有四百多年历史。传统俳句的特点是由十七音组成，分五、七、五音三节来写，而且每一首俳句，必须含有一个“季语”。仅十七音，无背景，尚凝练，重含蓄，要求作者既写出瞬间感受，借以抒发情怀，又要意蕴隽永，余韵袅袅，确实不易。俳句由于短小凝练，没有废话，在日本被称为“省略的文学”，又由于它富有节奏感、形象性强，人们赞其为文字的“音乐”或“绘画”。

松本女士的俳句，清新优美，委婉动人。拜读后，确有如见其人之感，使我仿佛触到了她的心灵。纵观三本俳句集，松本女士的句作，题材广泛，立意新颖，抒情真切，风格质朴。如果没有纯洁丰富的情感，没有深厚的生活基础，没有对人生的无限热爱和细心观察，没有诗人应具的天赋，要写出这么多意境优美、动人心弦的佳句，是不可想象的。我不能不为松本女士出众的艺术才华而赞叹。

说到题材广泛，我想这与松本女士一向重视

“吟行”大概不无关系吧。“吟行”一词虽然中国也用,但现在用的不多。唐代诗人张籍诗云:“僧房逢着款冬花,出寺吟行日已斜”。这里的“吟行”是指边吟诗边漫游。而在日本,“吟行”则多指俳人结伴亲临景点或名胜古迹,通过实地考察和亲身感受,创作俳句。中国历史上的大诗人李白、杜甫因战乱等原因被迫四处漂流,羁旅各地,将所见所闻和人民的疾苦以及对祖国大好河山加以艺术概括,为后世留下了大量脍炙人口的著名诗篇。我认为,日本“俳圣”松尾芭蕉的名著《奥州小路》,实际上就是一部他的“吟行”旅怀记录。

我们注意到,松本杏花女士这本《千里同风》,就收录了很多她的“吟行”佳作。其中有许多写于日本,还有大量佳句是她在访问中国厦门、武夷山、金门岛、东北各地、内蒙古大草原、浙江绍兴、云南以及访问印度、越南、柬埔寨时写下的,它们可谓各有特色,独具匠心。特别是作为书名的“千里同风”,就是取自于她访问福建省厦门时所创作并安排在书中第一页的那首气势磅礴的诗句:

千里同風夏の海峡潮満つる

千里同风,夏日海峡,涨满潮。

淡淡几笔,使我们仿佛听到了俳人的心声:“海峡两岸本是一家”,“希望两岸骨肉早日实现团聚”。请看,这是一位日本俳人对中国人民友好情谊的表示,多么难能可贵啊!

下面再来谈谈俳句的“季语”。细心的读者也许已经发现本书的译者叶宗敏先生在每一首俳句的注解中,都介绍了“季语”。这是本书的一大特点。“季语”在传统俳句中到底起什么作用,这正是中国读者普遍所希望了解的。

“季语”是俳句——作为音数被限定(十七音)的短诗所不能缺少的人们共有的一种季节感,是俳人创作时寄托感怀的自然表露,也是丰富俳句内涵的一种需要,而绝不是因为传统俳句的格律需要而随意加上去的。它在俳句中既可收“比兴”之效,又起“联想”、“暗示”、“象征”等作用。然而,这样一种作用,往往是外国人所不容易理解的。让我们举出松本女士的句例说明:

あかときの就義を今にほととぎす

天破晓,侠女就义,犹闻杜鹃啼。

这是俳人二〇〇七年七月来华参加在浙江绍兴市举行的“秋瑾就义一百周年”纪念活动时创作的

作品。这首俳句的“季语”是“杜鹃鸟”，表示夏日。俳人缅怀一百年前慷慨就义的女中豪杰、革命家秋瑾，成功而巧妙地运用了“杜鹃鸟”这一“季语”。在古时，日本人认为“杜鹃鸟”的高亢叫声有“战斗”和“招魂”的含义，又由于它鸣叫时，张开的口呈鲜红色，常被喻为“啼血”。这样，就使读者看到一位在中国尚处于黎明前的黑暗时代，为冲破黑暗而奋斗的鉴湖女侠英勇就义的光辉形象，也表达了作者对这位中国妇女解放运动先驱的无限敬仰。松本女士把“季语”——“杜鹃鸟”运用得如此娴熟，真是出手不凡。

说到“季语”，日本列岛美丽的大自然和四季变化，使情感细腻的日本人创造了很多优美的“季语”（不消说，不少“季语”是借用中国的），而“季语”的不断增多，又反过来使日本人进一步丰富了对自然界的认识，也进一步增加了对大自然的爱。这就使俳句中的“季语”，在日本文学发展的长河中日臻成熟，不仅增加了俳句的姿色，而且成为日本人的审美传统。“季语”作为日本的一笔文化遗产，成为人们考察和理解日本文化的关键词汇群。

松本杏花女士除了创作俳句外，在日本还教授茶道。俳句和茶道作为日本的传统艺术，崇尚“闲

寂(わび = wabi)”和“枯淡(さび = sabi)”的审美境界。它们的共同点是以简洁为上乘、厌恶华美。这种“尚朴”的精神,是日本所崇尚的美学意识。它的形成,在很大程度上受了中国的易、孔、老、庄、禅,特别是禅的影响。是否可以说,《易经》开其源,孔、老、庄畅其流,禅宗助其势。这表明,日本的这种美学意识与中国的理念也有相通之处。清代乾隆年间的诗人沈德潜总结的中国古诗审美传统之一,就是“古澹”。他说:“味则泊乎不觉其甘也,格则浑乎不觉其奇也,音则泠泠乎不觉其倾而动听也”(《乔慕韩诗序》)。这就是说,诗味力求淡泊,表现形式不加修饰,不追求奇特,音调泠然,却不取悦于人。由此可见,“闲寂”和“枯淡”,未必就是日本独有的。它们既是日本的,又跟中国人某些生活情感、情趣和文学欣赏习惯有相通、相似之处。这就是为什么中国人能够理解和接受日本的茶道,能够欣赏日本俳句的缘故。

然而,我们仍要如实地承认中日两国的文化和审美观存在着差异。中国人要确切而深刻地理解俳句,往往有一定的困难。正因为如此,今天在中国译介俳句,对于发展中日文化交流,增进两国人民的相互理解,具有重要意义。如果译者能够努力去接近

俳句作者的内心世界,能够努力去消除两国人民实际上存在着的美学意识上的差异,而真正做到汉译俳句既保持诗的形态美,又有诗的内涵,那么这一可贵的实践,对于中国人更深刻地理解俳句、了解日本人的心灵,对于推动俳句的汉译以及发展汉俳这一新的诗体,都是非常有益的。

依我之见,叶宗敏先生就是这样一位实践者。长期以来他翻译了大量的俳句,且有许多大胆的尝试和创新。大家知道,诗是很难翻译的。有人说,诗可译。也有人说,不可译。我认为,诗既可译,又不可译。一般来说,如果译诗是以传达意美为标准,那么大部分诗是可译的。但诗的形美,有的可译,有的不完全可译,有的则完全不可译。至于音美,包括音律、音韵、特殊的修辞法等,是不可译的。翻译俳句,也大致如此。从形式上说,有人主张俳句应译成长短句,有人主张应译成汉俳。叶先生属后者,其优点是能使读者欣赏到由五、七、五字三节构成的律诗。从形式看,类似日本俳句,但缺点是由于汉字不同于日本假名,信息量大,内容要膨胀许多,显得松散一些,不那么凝练。但译成长短句也未必就完美无缺。看来,两者各有千秋。但总的来说,叶先生的翻译,忠于原文,注重神韵、风格和节奏,并兼顾形式和韵

脚,足见叶先生对于日语和中国古典诗歌有深厚的功底和修养。

我作为俳句和汉俳的一个爱好者,对叶宗敏先生译注的松本杏花俳句集《千里同风》的付梓问世,表示衷心的喜悦和热烈的祝贺。

遵作者和译者之嘱,信笔拉杂地写了上面一些话,是为序。

二〇〇九年十二月二十七日于北京

序 文

劉 徳 有

松本杏花さんに初めてお目にかかったのは、
たしか三年前だったと記憶している。

2006 年の11 月、東京で開かれた国際俳句交流
協会第8 回大会に招かれたときのこと、『中国の
俳句・漢俳について——俳句との比較を中心に』
と題して講演を行ったが、日本各地からお見えに
なった俳人の方々の中に、さいたま市からわざわざ
お越しになられた松本杏花さんのお姿があっ
た。目立たない縞模様の入った濃紺の和服を身に
つけておられ、上品で落ち着いた感じの方という
印象だった。昼食会のとき、幸いに家内も入れて
いただき記念写真をとることができたが、参加者
が多く、忙しさに取り紛れて、ゆっくりお話ができ
なかったのが心残りだった。

ところが思いがけもなく、明くる年の4月下旬、松本さんから中国で翻訳出版された二冊目の句集『余情残心』が送られてきた。そのとき、数年前に松本さんからいただいた最初の句集『拈花微笑』を拝読したことを急に思い出した。そして先日、予期もせず、南京の葉宗敏氏から電話があり、氏の翻訳された松本さんの三冊目の句集『千里同風』の校正ゲラが上がって、間もなく出版の運びになるので、序文をとという依頼があった。

俳句について、正直言って右も左も分からない素人のわたしに序文をとというのは、恐縮の至りだが、友人の依頼であり、せっかくのご好意を無にするのは失礼千万、ただただ命に従うのみ、と相成ったわけである。

ところで俳句は、400年あまりの歴史を持つ、日本民族特有の文学形式のひとつで、5、7、5あわせて17の音からなる句に必ず「季語」を入れ、背景の描写などではなく、瞬間の印象をとらえた感慨だけが述べられるものだが、このように極度に洗練された句に含蓄をもたせて、嫋嫋たる余韻を残すことまで求められるのだから、容易な技ではない。短く凝縮された一句に余計な言葉が一切省かれて

いることから、俳句は日本では「省略の文学」とも呼ばれ、リズムカルで形象性が強いことから、文字の「音楽」または文字の「絵画」とも言われている。

松本杏花さんの句は、清新、優美、こまやかで人々の心を打つものがある。文は人なり、という言葉があるが、読んでいてまるで作者のこころと魂にじかに触れる思いがする。三冊の句集を通して言えることは、題材が広く、着想が新鮮で、詩情にあふれ、素朴であるということに要約されよう。もし、作者に純潔で豊かな感情と長い間の生活の蓄積がなく、人生にたいする限りない愛と細やかな観察がなければ、さらにまた詩人としての資質が具わっていなければ、人々の心の琴線に触れる美しい佳句をこんなにも多く世に送り出すことは到底不可能だと思う。松本さんのすぐれた芸術的才能に敬服せざるを得ないゆえんである。

ところで、題材が広いということは、松本さんがつねに「吟行」を重視しておられることと無関係ではあるまい。「吟行」という言葉は中国にもあるが、現在はあまり使われていない。唐の詩人、張籍の詩に「僧房逢着款冬花、出寺吟行日已斜」(僧房 路の臺に出逢い、寺を出でて吟行するに

日すでに斜めなり)とあるが、この場合の「吟行」は、詩歌や俳句をつくるため、景色のよいところや名所旧跡などに出かけていくというより、むしろ、詩歌を吟じながら漫遊する意味だと思われる。

中国の大詩人、李白も杜甫も、ときには戦乱のため、ときにはやむなく漂泊の生活に追いこまれ、全国を旅しながら、道中の所感や見聞、人民の苦しみや麗しい山河を描き、おびただしい名作をに後世に残したことはあまりにも有名である。俳聖・芭蕉の『奥の細道』も、言ってみれば「旅のころ」の記録であり、芭蕉の吟行でもあったと思われる。

松本さんの句集『千里同風』も、気がついてみると、吟行の作が数多く収められている。日本で作られた句の外に、中国のアモイ、武夷山、金門島、東北各地、内モンゴル大草原、浙江省紹興、雲南およびインド、ベトナム、カンボジアなどを訪問された際に書かれた多くの佳作が含まれており、いずれも特色があり、意匠が凝らされている。とりわけ、書名の『千里同風』は、福建省のアモイを訪ねた時に作られた巻頭を飾るあの迫力みなぎる一句から取ったものである。

千里同風夏の海峡潮満つる

淡々と描かれたこの一句から、身内である台湾海峡「兩岸の住民が一日も早く団欒されるよう」望む俳人の心の叫びが聞こえてくるようだ。中国人民に示された日本の俳人の温かい友好のお気持ちのなんと貴いことか！

次に「季語」についてだが、翻訳者の葉宗敏氏は訳文の注釈のなかで一つ一つ丁寧に、「季語」の紹介をしている。これは本書の一大特色であると言えよう。伝統俳句の中で、「季語」は一体どんな役割を果たすのか。この点は中国の読者が一番知りたいところだろう。

「季語」は、伝統俳句の約束事だからといって勝手気ままに付け加えればいいと言うようなものではないらしい。それは限られた音数(17音)の短詩として互いに共有する欠くことのできない季節感であり、俳人の創作の気持ちの表現であると同時に、俳句の内容を豊かにする必要性から生まれたものである、と聞いている。俳句の中で、「季語」は“比喩”“連想”“暗示”“象徴”などの役割を

果たしているが、々にして外国人には理解されにくい。ここで、松本さんの句を例に――

あかときの就義を今にほととぎす

これは2007年の7月、松本さんが浙江省の紹興市で行われた「秋瑾就義百周年」記念活動に参加されたときの作であり、使われた「季語」は夏を表す「ほととぎす」。100年前、正義のため従容として刑場に赴いた女傑、革命家の秋瑾を偲んで作られたこの句に、「ほととぎす」の「季語」を選んだのは、実に見事である。言い伝えによると、昔、日本人はホトトギスの甲高い鳴き声に、「戦闘のときに発する声」とか「相手の魂を誘い出す」というような意味があると言われていたそう。また、ホトトギスが鳴くときに開いた口が鮮紅色に見えることから、「啼血」に喩えられることもよくあるが、この句からは、中国の夜明け前のあの暗黒時代に、暗闇を突き破るため死を恐れず勇敢に奮闘して犠牲になった女性英雄・秋瑾の雄々しい姿が読み取られ、中国婦人解放運動の先駆者・秋瑾にたいする作者の限りない敬愛の念がひしひしと伝わ